秋田県立大学総合科学研究彙報　第18号（2017）：77－93

教育実習に向けた教職課程における指導の在り方に関する考察

― 今年度の教育実習の成果と課題をもとに ―

白　山　雅　彦

1　はじめに

「教育実習」は、現行の教育職員免許制度で免許状を取得するために設置されている大学の教職課程の必修科目の一つである。そして「教育実習」は、大学において学習した教育理論や技術などを学校という教育現場において試行することを通じて、学生自身の教職への適性や資質能力、進路選択等を考えることに意義を見出すことができる。つまり、「教育実習」は、大学の専門課程での学びや研究も含めた教職課程のいわば総仕上げであり、学校現場での修行の場であるとともに、それまでの学びをまとめて振り返ったり、その先への展望を具体化したりする契機となる科目とも言える。

本学は開学して18年目になるが、教職課程も開学とほぼ同時にスタートした。現在文部科学省から教職課程において認定を受けている免許状の種類と教科は、「高等学校一種理科、同農業、同工業」である（ここでは大学院は除く）。これまで教員職員免許状（以下「教員免許状」とする。）を取得した卒業生はシステム科学技術学部（以下「本荘Ｃ」とする。）と生物資源科学部（以下「秋田Ｃ」とする。）の2016（平成28）年３月卒業生までの実人数合計で394名である。これまでの卒業者数4,991名に占める教員免許取得率は7.89％であり１割にも満たない状況である。ちなみに、教科別では、理科は両Ｃ合計307名、農業は秋田Ｃで102名、工業は本荘Ｃで120名である（一人で２教科の免許状を取得する学生もいるため実人数合計とは合致しない）。このうち学校の教員となっている者は、分かっているだけで全国30名程度であり、教員免許状を取得しても教職に道に進む者が非常に少ないのが現状である。

一方、中央教育審議会（以下「中教審」とする。）の2015（平成27）年12月21日の答申『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について』において、大学の教員養成上の課題と今後について次のように指摘している。「教職課程の学生が学校や教職についての深い理解や意欲を持たないまま安易に教員免許状を取得し、教員として採用されているとの指摘もある。教員養成課程を有する大学・学部の附属学校を積極的に活用するなど、実践的指導力の基礎の育成に資するとともに教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせるための機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させること」（中略）「これらの教員養成上の重要課題に適切に対応し、併せて、各大学の個性や特色を発揮した教員養成を行うためには、養成段階で真に必要な基礎力を明確にした上で、厳格な成績評価はもとより、各大学の学部等において教育課程の科目全体を精選しつつ総合的かつ体系的に教員の養成を図っていくような取組」などの必要性を唱えている。さらに、「学校を取り巻く様々な教育課題に対応できる教員の養成を行うことができるよう、教職課程の科目を担当する教員の意識改革や資質能力の向上も重要である」としている。※下線は筆者。

「教育実習」は、大学での教職課程において実践的指導力を試される貴重な体験の期間である。またこの期間は、大学で学んだ理論と教育現場での実践を繋ぐ大切な教育活動であることから、その評価は教員を目指そうとする学生にとってその可能性を考える上で重要な指標となると考えられる。一般に「教育実習」における実習校の評価は、実習先の学校の校長によって

なされるが、それは学生には開示されない。本学ではそれをもとに大学として、「教育実習記録簿」や「教育実習事前事後指導」の実績などとも絡めた評価を大学の成績として開示している。実習先の学校の評価は、学生本人への評価でもあるが、ある意味で人材育成を標榜している大学の教職課程に対する評価にも繋がるものと考える必要がある。

前述した中教審答申にもあるように、教員養成段階において必要な基礎力を明確化し、厳格な成績評価をすることは、課程認定を受けている大学としては当然のことである。

そうした点から考えて、また、本学の教職課程の指導の在り方を考える上でも、教育実習実施校からの成績評価はもとより、教育実習を経験してきた学生自身の自己評価についても詳細に分析する必要がある。

本報告は、本学が教育実習生に対して行っている教育実習事前事後指導の主な内容、特に「教育実習ガイダンス」での指導において意識付けしていることを提示した上で、今年度実施した教育実習の成果と課題について各種のデータを分析する。そして、次年度以降の教育実習に向けた教職課程としての指導の在り方を考察する。

2　手　　法

手法としては、実習先の学校の校長からの「教育実習成績報告書」（＝学校評価）を総合的に分析するとともに、成績については昨年度の「教育実習成績報告書」との比較と、学生の自己評価とも比較する。その上で今年度教育実習を経験した本学の４年生の「教育実習記録簿」「教育実習を終えてからのアンケート調査」をもとにした実態調査から、評価の背景を確認し、今年度の教育実習生の成果と課題を明確にする。

それらをもとにして、「教育実習」という科目の特性から、本学の教職課程としての指導上の課題は何か、今後の指導の在り方等について考察する。

3　本学における教育実習指導の現状について

教職課程及び専門学科の全ての科目が「教育実習」に関連することになるが、学生に「教育実習」を直接的に認識させるための中心的な科目が「教育実習事前事後指導」である。

スケジュール的には、３年次の夏休み中の「現場教員による現場体験講座」（教職課程履修の３・４年生を対象に、本学卒業の教員を講師に招いての講話と協議）に始まり、10〜11月中に行う「教育実習体験発表会」（３年生に対して教育実習を終えた４年生が行う体験発表会）、２月下旬の「表現技法特別講座」（３年生を対象に外部講師による教師に必要な表現技法講習会）、３月上旬から中旬の「教育実習ガイダンス」（３年生を対象に４日間の集中講義で行う、教育実習の意義や心構えについての講義や、学習指導案作成と模擬授業の実施）、４月下旬の「高等学校授業観察」及び「教育実習直前指導」（４年生対象）などを実施している。

ここでは、はじめに３月に行う「教育実習ガイダンス」での指導内容を抜粋して紹介する。このガイダンスは、本学の教職課程運営委員会が作成した『教育実習の手引き』に基づいて実施している。その中の「Ⅲ　教育実習の実際」で指導している、教育実習の意義や目的、留意事項、及び「Ⅳ　教材研究の基本と学習指導案の作成」での授業づくりから抜粋して紹介する。

⑴　教育実習の意義

教育実習は、大学の専門課程及び教職課程で学んだ知識・理論や技術を、学校での実地指導における指導教員の指導と援助を受け、生徒との触れ合いを通して、教員として必要な資質や能力を高めるとともに、倫理的な責任をも自覚し、教員としてふさわしい基盤を形成すること。

⑵　教育実習の目的

1978（昭和53）年に教員養成審議会の教育実習専門委員会の報告で次の４点に集約したものをよくかみしめる必要がある。

①学校教育の実際について、体験的、総合的な認識を得ること。

②大学において修得した教科や教職に関する専門的な知識、理解や理論、技術を児童・生徒等の成長発達の促進に適用する実践的

能力の基礎を形成すること。

③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的態度と能力の基礎を形成すること。

④教育者としての愛情と使命感を深め、自己の教員としての能力や適性についての自覚を得ること。

⑶　教育実習期間の留意事項 ※項目のみ表示。

①教育実習の一日、②観察と参加、③授業参観と実習授業、④生徒との触れ合い、⑤実習記録簿、⑥教員としての責任、⑦服装・態度、通勤・その他

⑷　授業づくり

①教材研究の基本、②学習指導案、③板書計画と発問計画、④ねらいと評価などを中心にそのやり方等について説明するとともに、これまで教職課程や専門学科等で学んできたことを再確認しながら、改めて実習への自覚と責任を実感させるよう指導している。

次に、４月下旬に行っている「高等学校授業観察」について概観する。観察する時は視点を持つように指導したが、観察後の学生の声を何点か紹介する。「本時の目標が明確化されていた」「導入でどのようにして生徒を引き付けるかを注目したが、興味関心を持たせるために様々な工夫が見られた」「指示や発問については的確・明瞭で、生徒がそれに対してどう動いたり考えたりするかを観察したが、よく活動していた」「生徒の回答については否定せずに受け止めることが大切だと思った」「回答を間違えた生徒への支援が丁寧に行われていた」「生徒が活動している時には机間巡視や机間指導をして観察と指導を行っていた」「板書については、大きく分かり易くを徹底していた」「生徒が説明を聞いたり考えたりする時間と、板書を書きとる時間を明確に区別していた」「視線は一人一人に広く行き渡り、声も後ろまではっきり聞こえる声量であったし、抑揚も効果的だった」「まとめで演習をして理解を深めることは効果的だと思った」「授業の流れや授業構成がしっかりしており、事前の準備を用意周到にしなければならないと思った」などが上げられていた。

こうして、教育実習前に実際に高校の授業を観察することは、学生に学校という雰囲気を想起させ、学生が授業づくりをする上での具体的な対策にも役立つばかりではなく、プロの教員の姿勢から教育実習への覚悟や自覚を抱かせることも大きなねらいの一つとしているところである。

その後は、各学生が実習校の担当者と連絡を取りながら、実習期間中の単元を聞いて学習指導案を作成し、学内の教科教育法担当教員に添削してもらった上で、学生相互が模擬授業を見合うよう指示している。もちろん、私に指導案の添削を依頼してきたり、模擬授業を見て欲しいと言ってきたりしてくる学生もいる。こうして、予習や予行などの準備を整えて学生達は教育実習に出て行くことになる。

４　教育実習生への学校からの「教育実習成績報告書」の評価（＝学校評価）と学生の自己評価

⑴　2015（平成27）年度と2016（平成28）年度の学校からの評価の比較

教育実習生についての評価は、実習先の校長から「教育実習成績報告書」（＝学校評価）として実習終了後に大学宛に送られてくるものである。本学のその様式は、昨年度から評価の観点を20項目設定して、それぞれ５段階で学校から評価して頂くよう大幅に変更したため、それ以前のものと比較することはできない。そこで、昨年度（平成27年度）と今年度（平成28年度）のみの比較を試みることにした。

なおこの比較は、実習先の高等学校も指導教員も、また実習に行く学生も毎年異なるため、評価は厳密に比較できるものではないことを踏まえつつ、そこから得られたことを単年度の成果と課題と捉え、本学における教職課程でのその後の指導の参考にするために行ったものである。

【秋田Ｃ】（表１・２）

まずもって、表１・２を見ると、学校からの「教育実習成績報告書」（＝学校評価）の全体評価の平均点は、平成27年度が84.1、28年度が86.96であり、ほぼ同様に好評価を頂いた。

表１
平成27年度　教育実習の学校評価と自己評価の比較

《秋田キャンパス》17人分　　【学校評価】17人分　　全体評価の平均点84．1

評価事項	NO	評価の観点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点
教育目標	①	実習校の教育目標等を理解していたか。	0	0	2	10	5	71
		合計人数	0	0	2	10	5	17
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	11.76%	58.82%	29.41%	100.00%
		5段階評価の平均点			**4.18**			71.00
生徒指導	②	生徒理解に意欲をもって積極的に努力をしたか。	0	0	2	8	7	73
	③	生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか。	0	0	2	10	5	71
	④	生徒に対して、公平で受容的な態度で接することができたか。	0	0	1	7	9	76
	⑤	生徒集団の実態把握と生活指導ができたか。	0	0	2	12	3	69
	⑥	学級担任として教室環境や衛生への気配りができたか。	0	0	2	9	6	72
	⑦	学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか。	0	0	4	8	5	69
	⑧	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか。	0	0	4	12	1	65
		合計人数	0	0	17	66	36	119
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	14.29%	55.46%	30.25%	100.00%
		5段階評価の平均点			**4.16**			70.71
学習指導	⑨	教科書や高等学校学習指導要領の内容に基づいて、教材を分析することができたか。	0	1	2	7	7	71
	⑩	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料の開発・作成ができたか。	0	1	1	10	5	70
	⑪	教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して学習指導案を作成することができたか。	0	1	0	11	5	71
	⑫	教材研究・授業準備等が十分なされていたか。	0	1	1	8	7	72
	⑬	教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか。	0	1	1	11	4	69
	⑭	生徒の反応を生かし、協力しながら授業を展開することができたか。	0	1	1	10	5	70
	⑮	板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか。	0	1	3	9	4	67
	⑯	指導教諭等の意見やアドバイスを踏まえて、授業を企画・運営・展開できたか。	0	1	0	7	9	75
		合計人数	0	8	9	73	46	136
		合計人数の割合	0.00%	5.88%	6.62%	53.68%	33.82%	100.00%
		5段階評価の平均点			**4.15**			70.63
勤務態度	⑰	実習校の服務規程等にしたがって、きちんと勤務できたか。	0	0	1	3	13	80
	⑱	服装、態度、言葉遣い等が教師としてふさわしかったか。	0	0	1	7	9	76
	⑲	率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか。	0	0	0	9	8	76
	⑳	自己の課題を認識し、課題解決にむけて学び続ける姿勢を持っていたか。	0	0	2	4	11	77
		合計人数	0	0	4	23	41	68
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	5.88%	33.82%	60.29%	100.00%
		5段階評価の平均点			**4.54**			77.25
		評価事項の合計人数の総数	0	8	32	172	128	340
		総数の割合	0.00%	2.35%	9.41%	50.59%	37.65%	100.00%

①評価事項別比較：「実習校の教育目標」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.18と4.5であり、この２年間の学生は学校の教育目標を概ね理解して実習していたと考えられる。５の評価の割合が29.41％から54.17％へと24.76ポイントと大幅に伸びていることは、事前指導で学校の教育目標が学校の教育活動の指針になるとの説明を踏まえて、実習校の基盤となるべき部分を意識して実習に臨んだことが伺える。

②評価事項別比較：「生徒指導」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.16と4.19であり、概ね妥当な指導ができたと判断できる。特に、評価の観点別に見ると「②生徒理解に意欲をもって積極的に努力をしたか」「④生

表 2
平成28年度　教育実習の学校評価と自己評価の比較

《秋田キャンパス》24人分　【学校評価】24人分　全体評価の平均点86．96　【自己評価】24人分　全体評価の平均点77．96

評価事項	NO	評価の観点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点
教育目標	①	実習校の教育目標等を理解していたか。	0	0	1	10	13	108	0	1	4	10	9	99
		合計人数	0	0	1	10	13	24	0	1	4	10	9	24
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	4.17%	41.67%	54.17%	100%	0.00%	4.17%	16.67%	41.67%	37.50%	100%
		5段階評価の平均点			**4.5**			108.00			**4.13**			99.00
生徒指導	②	生徒理解に意欲をもって積極的に努力をしたか。	0	0	1	7	16	111	0	2	4	6	12	100
	③	生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか。	0	0	3	16	5	98	0	1	9	11	3	88
	④	生徒に対して、公平で受容的な態度で接することができたか。	0	0	0	12	12	108	0	2	2	11	9	99
	⑤	生徒集団の実態把握と生活指導ができたか。	0	0	4	14	6	98	0	5	11	4	4	79
	⑥	学級担任として教室環境や衛生への気配りができたか。	0	0	2	19	3	97	0	5	4	8	7	89
	⑦	学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか。	0	0	3	18	3	96	0	4	10	7	3	81
	⑧	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか。	0	0	4	16	4	96	0	2	10	11	1	83
		合計人数	0	0	17	102	49	168	0	21	50	58	39	168
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	10.12%	60.71%	29.17%	100%	0.00%	12.50%	29.76%	34.52%	23.21%	100%
		5段階評価の平均点			**4.19**			100.57			**3.68**			88.43
学習指導	⑨	教科書や高等学校学習指導要領の内容に基づいて、教材を分析することができたか。	0	0	2	14	8	102	0	1	4	10	9	99
	⑩	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料の開発・作成ができたか。	0	0	2	12	10	104	0	2	4	8	10	98
	⑪	教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して学習指導案を作成することができたか。	0	0	2	14	8	102	0	2	2	13	7	97
	⑫	教材研究・授業準備等が十分なされていたか。	0	0	1	10	13	108	0	0	8	10	6	94
	⑬	教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか。	0	0	1	18	5	100	0	1	9	9	5	90
	⑭	生徒の反応を生かし、協力しながら授業を展開することができたか。	0	0	2	12	10	104	0	0	8	7	9	97
	⑮	板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか。	0	0	3	16	5	98	1	3	7	8	5	85
	⑯	指導教諭等の意見やアドバイスを踏まえて、授業を企画・運営・展開できたか。	0	0	2	3	19	113	0	0	4	10	10	102
		合計人数	0	0	15	99	78	192	1	9	46	75	61	192
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	7.81%	51.56%	40.63%	100%	0.52%	4.69%	23.96%	39.06%	31.77%	100%
		5段階評価の平均点			**4.33**			103.88			**3.97**			95.25
勤務態度	⑰	実習校の服務規程等にしたがって、きちんと勤務できたか。	0	0	1	1	22	117	1	0	0	4	19	112
	⑱	服装、態度、言葉遣い等が教師としてふさわしかったか。	0	0	1	5	18	113	0	2	7	9	6	91
	⑲	率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか。	0	0	2	11	11	105	1	1	5	11	6	92
	⑳	自己の課題を認識し、課題解決にむけて学び続ける姿勢を持っていたか。	0	0	1	8	15	110	0	1	2	11	10	102
		合計人数	0	0	5	25	66	96	2	4	14	35	41	96
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	5.21%	26.04%	68.75%	100%	2.08%	4.17%	14.58%	36.46%	42.71%	100%
		5段階評価の平均点			**4.64**			111.25			**4.14**			99.25
		評価事項の合計人数の総数	0	0	38	236	206	480	3	35	114	178	150	480
		総数の割合	0.00%	0.00%	7.92%	49.17%	42.92%	100%	0.63%	7.29%	23.75%	37.08%	31.25%	100%

徒に対して、公平で受容的な態度で接することができたか」の２観点では、２年連続５の評価を頂いた学生が多数であった。４の評価の割合が5.25ポイント上がったことと併せると、生徒指導の基本的な指導の在り方を踏まえ、生徒との関わりを大切にしながら接していたことが伺える。

③評価事項別比較：「学習指導」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.15と4.33であり、今年度の評価が高くなっている。観点別では４の評価を得ている学生の割合が53.68％と51.56％とほぼ同様であるが、５の評価を得ている割合が33.82％から40.63％に大幅に増えている。また、昨年度２と評価された者が全観点で１人ずついたが、今年度はいなかったことなどが２年間の大きな違いと言える。これは、教員の指導力の根幹となる学習指導において学生の多くが努力した成果の表れとして受け取るとともに、今後も平均以上の評価が得られるよう学習指導力を身に付ける指導をしていく必要がある。

④評価事項別比較：「勤務態度」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.54と4.64と２年連続して４つの評価事項中では最も高い評価の平均点となっており、実習中の言動や態度等については概ね好評価を頂いた。学生の実習に臨むための自覚や姿勢については、今後も好評価が得られるよう、普段の生活も含め教員としてあるべき態度等についての指導を専門学科の教員とも連携しながら継続して指導する必要がある。

【本荘Ｃ】（表３・４）

まずもって、表３・４を見ると、学校からの「教育実習成績報告書」（＝学校評価）の全体評価の平均点は、それぞれ80.08と74.93であり、秋田Ｃより低かっただけでなく、今年度の平均

表 3
平成27年度　教育実習の学校評価と自己評価の比較

《本荘キャンパス》13人分　　【学校評価】13人分　　全体評価の平均点80. 08

評価事項	NO	評価の観点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点
教育目標	①	実習校の教育目標等を理解していたか。	0	0	3	5	5	54
		合計人数	0	0	3	5	5	13
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	23.08%	38.46%	38.46%	100%
		5段階評価の平均点			**4.15**			54.00
生徒指導	②	生徒理解に意欲をもって積極的に努力をしたか。	0	0	0	9	4	56
	③	生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか。	0	0	4	8	1	49
	④	生徒に対して、公平で受容的な態度で接することができたか。	0	0	0	5	8	60
	⑤	生徒集団の実態把握と生活指導ができたか。	0	0	6	6	1	47
	⑥	学級担任として教室環境や衛生への気配りができたか。	0	0	5	6	2	49
	⑦	学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか。	0	0	6	5	2	48
	⑧	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか。	0	0	9	3	1	44
		合計人数	0	0	30	42	19	91
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	32.97%	46.15%	20.88%	100%
		5段階評価の平均点			**3.88**			50.43
学習指導	⑨	教科書や高等学校学習指導要領の内容に基づいて、教材を分析することができたか。	0	0	5	6	2	49
	⑩	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料の開発・作成ができたか。	0	0	3	7	3	52
	⑪	教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して学習指導案を作成することができたか。	0	0	4	6	3	51
	⑫	教材研究・授業準備等が十分なされていたか。	0	0	1	11	1	52
	⑬	教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか。	0	0	6	6	1	47
	⑭	生徒の反応を生かし、協力しながら授業を展開することができたか。	0	0	4	7	2	50
	⑮	板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか。	0	0	6	6	1	47
	⑯	指導教諭等の意見やアドバイスを踏まえて、授業を企画・運営・展開できたか。	0	0	0	6	7	59
		合計人数	0	0	29	55	20	104
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	27.88%	52.88%	19.23%	100%
		5段階評価の平均点			**3.91**			50.88
勤務態度	⑰	実習校の服務規程等にしたがって、きちんと勤務できたか。	0	0	0	3	10	62
	⑱	服装、態度、言葉遣い等が教師としてふさわしかったか。	0	0	1	7	5	56
	⑲	率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか。	0	0	3	6	4	53
	⑳	自己の課題を認識し、課題解決にむけて学び続ける姿勢を持っていたか。	0	0	1	7	5	56
		合計人数	0	0	5	23	24	52
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	9.62%	44.23%	46.15%	100%
		5段階評価の平均点			**4.37**			56.75
		評価事項の合計人数の総数	0	0	67	125	68	260
		総数の割合	0.00%	0.00%	25.77%	48.08%	26.15%	100%

点が昨年度比マイナス5.15と大幅に低下しており、あまりの落ち込みに目を疑ってしまったほどである。

①評価事項別比較：「実習校の教育目標」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.15と4.07であり、秋田Ｃに比べると両年ともに低いが、実習校の教育目標を概ね理解して実習に臨んでいたものと考える。

②評価事項別比較：「生徒指導」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ3.88と3.92であり、前年に比べると若干上がったが秋田Ｃに比べるとそれぞれ0.28と0.27低くなっている。昨年度はいなかった１と２の評価を得ている者が今年度はいること、３の評価の比率が32.97％から40.82％に7.85ポイント上がる一方、４の評価の比率は46.15％から40.82％へ5.33ポイント、５の評価の比率も20.88％

表 4
平成28年度　教育実習の学校評価と自己評価の比較

《本荘キャンパス》14人　【学校評価】14人分　全体評価の平均点74．93　【自己評価】14人分　全体評価の平均点73．29

評価事項	NO	評価の観点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点	評価点1	評価点2	評価点3	評価点4	評価点5	合計点
教育目標	①	実習校の教育目標等を理解していたか。	0	0	3	7	4	57	2	1	2	6	3	49
		合計人数	0	0	3	7	4	14	2	1	2	6	3	14
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	21.43%	50.00%	28.57%	100%	14.29%	7.14%	14.29%	42.86%	21.43%	100%
		5段階評価の平均点			**4.07**			57.00			**4.00**			52.00
生徒指導	②	生徒理解に意欲をもって積極的に努力をしたか。	0	0	3	8	3	56	2	0	2	3	7	55
	③	生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか。	0	1	7	6	0	47	0	2	2	6	4	54
	④	生徒に対して、公平で受容的な態度で接することができたか。	0	0	3	5	6	59	2	0	2	4	6	54
	⑤	生徒集団の実態把握と生活指導ができたか。	0	0	9	5	0	47	1	2	6	3	2	45
	⑥	学級担任として教室環境や衛生への気配りができたか。	0	0	4	6	4	56	1	3	1	4	5	51
	⑦	学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか。	1	0	8	4	1	46	1	1	4	7	1	48
	⑧	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか。	0	2	6	6	0	46	1	4	5	3	1	41
		合計人数	1	3	40	40	14	98	8	12	22	30	26	98
		合計人数の割合	1.02%	3.06%	40.82%	40.82%	14.29%	100%	8.16%	12.24%	22.45%	30.61%	26.53%	100%
		5段階評価の平均点			**3.92**			51.00			**3.82**			49.71
学習指導	⑨	教科書や高等学校学習指導要領の内容に基づいて、教材を分析することができたか。	0	0	6	7	1	51	2	0	3	5	4	51
	⑩	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料の開発・作成ができたか。	0	0	5	7	2	53	2	0	3	5	4	51
	⑪	教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して学習指導案を作成することができたか。	0	0	6	6	2	52	1	2	5	4	2	46
	⑫	教材研究・授業準備等が十分なされていたか。	0	0	7	3	4	53	1	1	4	6	2	49
	⑬	教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか。	0	0	8	5	1	49	1	0	6	5	2	49
	⑭	生徒の反応を生かし、協力しながら授業を展開することができたか。	0	0	6	5	3	53	1	2	4	5	2	47
	⑮	板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか。	0	0	7	7	0	49	0	4	4	4	2	46
	⑯	指導教諭等の意見やアドバイスを踏まえて、授業を企画・運営・展開できたか。	0	0	3	8	3	56	1	1	2	7	3	52
		合計人数	0	0	48	48	16	112	9	10	31	41	21	112
		合計人数の割合	0.00%	0.00%	42.86%	42.86%	14.29%	100%	8.04%	8.93%	27.68%	36.61%	18.75%	100%
		5段階評価の平均点			**3.71**			52.00			**3.76**			48.88
勤務態度	⑰	実習校の服務規程等にしたがって、きちんと勤務できたか。	0	0	1	7	6	61	0	1	1	0	12	65
	⑱	服装、態度、言葉遣い等が教師としてふさわしかったか。	0	0	2	6	6	60	1	0	1	3	9	61
	⑲	率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか。	1	1	5	6	1	47	0	2	1	6	5	56
	⑳	自己の課題を認識し、課題解決にむけて学び続ける姿勢を持っていたか。	0	1	4	8	1	51	1	1	1	5	6	56
		合計人数	1	2	12	27	14	56	2	4	4	14	32	56
		合計人数の割合	1.79%	3.57%	21.43%	48.21%	25.00%	100%	3.57%	7.14%	7.14%	25.00%	57.14%	100%
		5段階評価の平均点			**3.91**			54.75			**4.58**			59.50
		評価事項の合計人数の総数	2	5	103	122	48	280	21	27	59	91	82	280
		総数の割合	0.71%	1.79%	36.79%	43.57%	17.14%	100%	7.50%	9.64%	21.07%	32.50%	29.29%	100%

から14.29％へ6.59ポイントとそれぞれ下がっていることが背景にあると言える。

○評価１とされた評価の観点は「⑦学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか」であり、また２の評価とされた観点は「③生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか」と「⑧学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか」であった。また、今年度５の評価がなかった評価の観点は、「③生徒の個々の状況を理解し・・・」と「⑤生徒集団の実態把握と生活指導ができたか」「⑧学習集団形成に必要な・・・」であった。

○いずれも生徒指導上、学級経営上教員として備えていなければならない基本的なスタンスが欠けていたとの評価であると受け止めなければならない。このことは、生徒理解や学級集団についての理解が不足しているとともに、教員としての自覚や学級担任の役割についても認識が不足していると考えられるため、改めて「教育実習事前事後指導」はもとより、教職課程の「教職に関する科目」の関係科目での指導の在り方になんらかの工夫をする必要があると考える。

③評価事項別比較：「学習指導」について

○５段階評価の平均点が昨年度は3.91、今年度は3.71で若干下がった。秋田Ｃに比べるとそれぞれ0.24と0.62低くなっている。生徒指導の差よりも開きが大きくなっている。昨年度に比べると、５と評価された者の割合が19.23％から14.29％に4.94ポイント、４の評価も52.88％から42.86％に10.02ポイント減っていること、逆に３の評価が27.88％から42.86％に14.98ポイントも大幅に増えていることが背景にあり、相対的に昨年度よりも学習指導力が劣っていると言わざるを得ない。

○特に今年度５の評価が一つもなかった観点としては「⑮板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか」であり、５が一つだった観点は「⑨教科書や高等学校学習指導要領の内容に基づいて、教材を分析することができたか」と「⑬教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか」であった。さらに、昨年度７人も５の評価を得た観点「⑯指導教諭等の意見やアドバイスを踏まえて、授業を企画･運営･展開できたか」では、今年度評価５を得られたのは３人であった。

○学習指導上の基本的な表現の技術や態度がしっかり身に付いていなかったということや、教科内容への理解不足、教育実習生という学ぶ立場上絶対に身に付けておかなければならない基本的な姿勢についての評価が低下したことは残念であった。

○この結果を踏まえ、教職課程の特に「教科に関する科目」の指導担当者は、今後は学生に対して、改めて教科指導をする上での知識・理解の大切さや指導法などの学習指導上の基本的な在り方の指導をしたり、「教育実習事前事後指導」担当者も教育実習に対する学生の自覚をもっと促したりするなど、今後に向けて多方面から対策を講じなければならないと考える。

④評価事項別比較：「勤務態度」について

○５段階評価の平均点がそれぞれ4.37と3.91と今年度の平均値が0.46と大幅に低下している。昨年度なかった１と２の評価が３つあったことや、３の割合が9.62％から21.43％に11.81ポイントも激増したり、５の割合が46.15％から25％に21.15ポイントも激減したことなどがその主な原因と言える。

○特に今年度は、人数的には少ないが評価１や２とされた評価の観点があった。「⑲率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか」であり、もう一つは「⑳自己の課題を認識し、課題解決にむけて学び続ける姿勢を持っていたか」であった。これらの評価が低いということは、教職に就く上で必要とされている大切な資質である、責任感や使命感、あるいは主体的に学び続ける姿勢を現時点では持ち合わせていない者がいると考えざるを得ない。

○このように、教育実習生の勤務態度の評価が低いということは、教育実習に臨む姿勢が問われることはもちろんであるが、教職課程を真剣に考えていないか、やる気がなくて不真面目か、人格的に問題があるか等が考えられる。この評価結果からは、今年度はいわば教員としての資質能力や適性に問題がある学生がいると言わざるを得ない。

○「教育実習」及び「教育実習事前事後指導」担当教員は、そうした学生に対して課題を指摘して認識させるとともに、意識改革のための指導や、改善に向けた自主的な取り組みを示唆するなどの必要がある。また、教育実習先の学校への影響を考えると、次年度に向けて早急に対策を講じなければならない。

⑵　2016（平成28）年度の「教育実習成績報告書」（＝学校評価）と自己評価の比較

【秋田Ｃ】（表２）

○まずもって、学校からの全体評価の平均点と自己評価の全体評価の平均点は、それぞれ86.96点と77.96点となっていて、自己評価の方が９点低くかった。

○次に学校評価と自己評価を比較してみると、一番目立つのが、学校からの評価では１と２の評価がないのに、自己評価では、４つの評価事項及び評価の20観点中17観点の20カ所に１か２と評価している学生がいた。特に１と自己評価した観点が３つもあった。加えて、４と５の評価の総数の割合の合計は、学校評価が92.09なのに対して、自己評価は68.33と23.76ポイントも低くなっている。ここにも、全体的に学校評価よりも自己評価の方が低くなっている原因があることがわかる。

○これらのことは、１と２の評価の総数の割合の合計はわずか7.92％ではあるが、実習中にプロの教員の授業参観を重ねるにつけ「授業はかくあるべし」との思いに至り、それに近づこうとしてもその差は簡単には縮められず、結局自己評価を低くしてしまっていることも考えられる。また、学生の中には不安や自信が持てない分野を抱えたまま教育実習に参加したことを恥じたり、悔いたりしている者が

いること、実習期間中の様々な場面で指導教員から指摘されたことや、生徒対応で満足できなかったことなどが負のイメージとして残っている学生がいることを物語っているようである。

○自己評価する時には、人にもよるだろうが謙虚さとか遠慮という心理も影響することもあるとは思うが、しかし実際に何かしら思い当たる事実や場面があったからこその自己評価であると考え、この自己評価は学生本人の率直な評価だと思って尊重したい。

○特に自己評価で４と５の評価の割合が低かった観点は、生徒指導では「⑤生徒集団の実態把握と生徒指導ができたか」「⑦学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか」「⑧学級集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか」の３つ。学習指導では「⑬教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか」「⑮板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか」の２つ。勤務態度の評価は全体的に高かったので、あえて挙げるとするならば、「⑱服装、態度、言葉遣い等が教師としてふさわしかったか」と「⑲率先して自らの役割を身につけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができたか」の２つであった。

○また、僅か３つではあるが学生が１という自己評価を下した観点は、「⑮板書や発問、的確な話し方等・・・」と「⑰実習校の服務規程等にしたがって、きちんと勤務できたか」「⑲率先して自らの役割を見つけたり・・・」であった。実際に注意されたとか、大いに恥をかいたなどの経験をもとにしたものではないかと考える。

○このように自分を低く評価した観点については、指摘されたり、実感したりしたことによって自分の弱点や自己課題をしっかり把握できたということにも繋がっていることとして捉えることもできる。もちろん自己評価の高低だけで自己課題が把握できるとは限らないものの、今後学生自身がこうした振り返りをしながら、教員としての資質能力の向上に向けて自己の課題を明確化した上で、その解決や自己改善に努めていくことを期待したい。

○なお、参考までに学校からの全体評価の最高点は96点、最低点は70点で、その差は26点だったが、自己評価の全体評価の最高点は99点、最低点は57点で、その差は42点だった。自己評価の合計が不合格点であった学生の学校評価と自己評価との差は27点であり、過小評価しすぎているのではないかと思われる。

○また、学校評価の全体評価点よりも低く評価している学生が24人中18人であったが、その差が最大だった例はマイナス27点であった。また、学校の全体評価点よりも自己評価の全体評価点が上回った学生は４人いたが、その差はプラス９点からプラス１点の範囲内であり、いたずらに自己評価を高くしているいわゆる過大評価をしている学生はいないと見た。

【本荘Ｃ】（表４）

○学校からの全体評価の平均点と自己評価の全体評価の平均点は、それぞれ74.93と73.29となっており、本荘Ｃでも自己評価の方が1.64点低くなっている。しかし、どちらも秋田Ｃよりそれぞれ12.03と4.67低いが、特に学校評価に大きな開きがある。両キャンパスにおける成績の違いや、学校と学生本人との認識の違いはどのようなことから生じているかについても考えてみたい。

○学校評価に１と２が入っている観点は、生徒指導の３つと勤務態度の２つの合計５つ、６カ所であるが、自己評価で１と２が入っている観点は、20観点全てであり合計30カ所もあるところが目立つ。

○学校評価と自己評価の全観点における各評価点の総数の割合を比較すると、学校評価では、１＝0.71％、２＝1.79％、３＝36.79％、４＝43.57％、５＝17.14％、自己評価は、１＝7.5％、２＝9.64％、３＝21.07％、４＝32.5％、５＝29.29％であった。学校評価では、３以下が39.29％、４と５で60.71％あったが、自己評価では３以下の割合が38.21となっているが、４と５では61.79％と若干高くなっており、特に５は自己評価が12.15ポイントも高かった。

○全体を平均して見ると、上記にあるように学校評価よりも自己評価の方が低くなっている

が、学生の中には観点によっては自己評価を５としている者が多くいることが分かった。一方、自己評価で１と２の総数の割合は17.14％で、秋田Ｃの7.92％に比べて大きな割合となっていた。自分を低く評価している者もいるところが特徴である。いわば、自己評価が、全体としては上下に分散していると言えるようだ。

○特に学校評価に比べて自己評価の４と５の評価が高かった観点は、生徒指導では「③生徒個々の状況を理解し、適切に接することができたか」「⑦学級運営全般における事務処理能力が備わっていたか」の２つ。学習指導では両者ほぼ同じであった。勤務態度では「⑲率先して自らの役割を見つけたり・・・」「⑳自己の課題を認識し、課題解決に向けて学び続ける姿勢を持っていたか」の２観点であった。

○逆に学校評価に比べて自己評価の４と５の評価が低かった観点は、生徒指導では「⑧学級集団形成に必要な基礎理論・知識を習得し実践できていたか」の１つ。学習指導では「⑪教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して学習指導案を作成することができたか」の１つ。勤務態度については低い評価は少なく全体的には高い評価だった。

○秋田Ｃとの大きな違いは、総じて学校評価も自己評価も低かったということであったが、唯一勤務態度の自己評価の平均点が0.44ポイント上回った。

○なお、参考までに学校からの全体評価の最高点は92点、最低点は62点で、その差は30点だったが、自己評価の全体評価の最高点は95点、最低点は28点で、その差は67点もあった。学校評価の全体評価点よりも自己評価を低くしている学生が大半であるが、その差が最大マイナス45点の学生がいた。あまりにも差があり過ぎるため、個人面談をしてその原因を探ったところ、教育実習期間中のほとんどの場面で、学習指導も生徒指導もまだまだ力不足であるということを痛切に感じたための自己評価であるとのことだった。やや過小評価しているきらいはあるものの、反省しきりであった。課題克服に向けて具体的な取組例を提示したので今後の努力に期待したい。

○また、学校の全体評価点よりも自己評価の全体評価点が上回った学生は８人いたが、その差はプラス13からプラス２の範囲内であり、極端に自分を過大評価している学生はいないものの、秋田Ｃに比べると自己評価を高くしている学生が相対的に多いと言える。一方では、自分を過小評価しているのではないかと思われる学生もおり、本荘Ｃでの自己評価は２極化していといえる。

両キャンパスの学生のこれらの現実を教職課程の授業担当者はしっかり認識し、１年次から学習指導や生徒指導に関連する事柄については、４年次に実施する「教育実習」という実践の場で役立つような指導の徹底を図るとともに、教職についての資質能力や適性について共通理解して、相互に情報交換する必要がある。特に、資質や能力、適性等についての見極めを学生本人に任せるだけでなく、教員側でも授業の成績評価時などにおいて見極める必要があると考える。このことについては、教職課程全体で協議する必要性を感じている。

５　「教育実習を終えてからのアンケート調査」から言えること

これまで学校評価と自己評価を概観したが、特に自己評価とも関わる資料として、学生へのアンケート調査結果をひも解いて、学生の認識を確認し、今後の指導の参考にしたい。

⑴　教育実習で生徒指導上大変だったことや苦労したこと（表５－１）

○両キャンパス合計で19と最も多かった声が「生徒氏名認識」で、他を圧倒していた。これは、生徒との様々な関わりの場面で、うまくコミュニケーションが取れなかったということと関連しているようである。もどかしい思いをどれだけ抱いた学生が多かったかを物語っていると言える。具体的な学生の声からその辺の思いを見ることにする。

・生徒理解のためにも、生徒の顔と名前をできるだけ早く覚える必要がある。

・生徒の名前と顔を覚えることに苦労したが、

表５－１
平成28年度　教育実習で生徒指導上、大変だったことや苦労したこと（複数回答）

質問項目	秋田C　24人分	本荘C　14人分	合計
挨拶	2	1	3
指示伝達	6	0	6
学級日誌	2	2	4
出欠確認	2	0	2
注意	6	3	9
生徒氏名認識	11	8	19
清掃指導	6	1	7
生徒の反応	4	2	6
生徒との問答	4	5	9
生徒理解（共感的理解）	5	3	8
一緒に活動	5	4	9
傾聴	2	0	2
表情	2	4	6
視線	2	1	3
声量・トーン・滑舌	1	2	3
しかる	3	1	4
その他	・生徒からの相談への対応 ・どこまでやればよいかの見極め	・HRでの生徒対応	

ＳＨＲや清掃活動、休み時間や昼休みに生徒と会話したり活動したりして、できるだけ関わるよう心掛けた。

・一部の生徒とは打ち解けられたが、クラスの全員とは打ち解けることができなかった。また、内気な生徒にも声がけしているとちゃんと反応してくれるようになった。積極的な生徒だけでなく、そうした生徒にも等しく接していくことが大切だと思った。

・自分から積極的にコミュニケーションをとっていくことが生徒との距離を縮め、生徒の安心感にも繋がるし、授業での反応もよくなることが分かった。

・生徒と早くスムーズにコミュニケーションをとるために、自分が自己紹介をしてから生徒に自己紹介カードを書いてもらったらうまくいった。

○次は、「注意」と「生徒との問答」の９つであった。「注意」と同じように、表の下に「しかる」もあるが、それをプラスすると１３ということになる。立場上経験がないことからの戸惑いがあったようだ。実際の声を見てみる。

・生徒に注意したいと思った場面で、教育実習生はどこまでやってよいのか悩んだ。どう注意したらよいのか分からなかった。

・教育実習生として、どこまで教師として振る舞えばよいか、どこまで生徒の悩みに踏み込んでよいのかが難しかった。

・生徒との距離感をしっかり取ることが大切だ。こちらで距離感を調整する必要がある。

○「生徒との問答」は、「指示伝達」や「清掃指導」「生徒の反応」「生徒理解」「一緒に活動」などとも関連していると思われる。具体の声をあげてみた。

・挨拶を自分からするようにして生徒が話しやすい雰囲気を作ることが必要。

・清掃指導では、教師が率先して清掃することが生徒に手本を示すことになるほか、生徒との距離を縮める大切な機会にもなった。

・常に漏らさずにメモを取り、ＳＨＲでは生徒に正しく情報を伝える必要がある。

・生徒から相談を受け真剣に聞くことはできたが、適切なアドバイスはできなかった。

・生徒への伝え方は、一方的に話をするのではなく、「どうしたらいいだろうか？」などと疑問形にして生徒の考えを引き出しながら対応することが大切だ。

・自分の考えを押し付けず、生徒の考えを尊重しながら指導することが大切だ。

・生徒と接する時は、常に夢や目標を持たせるように意識して対応することが大切だ。

○次に、「表情」や「傾聴」「視線」「声・トーン・滑舌」などについてもいろいろ反省するところがあったようである。主な声を次にあげる。

・朝のＳＨＲでは教員が元気よく声かけして生徒の一日のモチベーションアップに繋げることが大切だ。

・ＳＨＲという短時間でも、クラス全員の顔を見て話しながら、様子を観察することが大切だ。

・連絡事項は、生徒が聞き逃さないように注意しながら、大きな声ではっきりと、生徒の方を見て伝えることが大切だ。

⑵　教育実習で学習指導上大変だったことや苦労したこと（表５－２）

○両キャンパス合計で最も多かった声が「教授法、指導法」、次いで「教材研究」「板書」「発問」と続いた。

○これらに関しては、教育実習終了者が必ず述べる感想である。昔からそこは変わっていない。教授法や指導法にこれでよしということはないからである。大学入学後３年と数ヶ月にわたって積み重ねてきた専門的な知識や教養、そして教授法等を力として発揮できる機会を心待ちにして教室の生徒の前で試してみたにもかかわらず、学習指導の厳しさや難しさに直面したからこそ言えることがあげられたものと考える。

○失敗して恥をかいたこと、生徒に迷惑をかけてしまったこと、指導教諭から指導されたことなどを、もう一度振り返ること、そしてそれらを整理して不足していることは何かなどの自己課題をしっかり把握し、その克服や改善に向けて再び学習や研究を進めていくことに意味があるといえる。

○その際、単なる知識や教養、技能や技術的なことだけに留まることなく、自分の教職への適性という部分についてもしっかりした判断をすることも必要である。具体的な声を見てみる。

・教えるための知識をもっと身に付けておかなければならない。そのためには視野を広げ多くの本を読んで知識を増やし、多くの人の話を聞き、いろいろ経験することが必要だ。

・一教えるには百の知識を身に付ける必要がある。１時間の授業をするには、その何倍もの教材研究が必要だ。専門に関してたくさんの引き出しを持つ必要がある。

・教科に関する知識を強化し、分かり易い解

表５－２
平成28年度　教育実習で学習指導上、大変だったことや苦労したこと（複数回答）

質問項目	秋田Ｃ　24人分	本荘Ｃ　14人分	合計
教材研究	12	11	23
教授法、指導法	15	10	25
学習指導案	4	3	7
板書	11	9	20
発問：内容・聞き方・タイミング・指名	10	6	16
資料・小テスト等の作成	5	2	7
実験（演示実験含む）	5	6	11
生徒の反応	9	4	13
生徒との問答	8	3	11
表情	2	2	4
視線	3	2	5
声量・トーン・滑舌	3	4	7
出欠確認	2	0	2
生徒指名確認	9	5	14
机間指導	2	2	4
その他	・担当教科以外の質問への対応 ・授業の構成と時間配分	・生徒にデスカッションさせること ・時間配分	

説や具体的な例示ができるような指導力を身に付けることが必要だ。
・学習指導要領を踏まえた授業ができるよう、教材研究や教材の精選をする必要がある。
・発問・板書などを含め、生徒の立場に立って工夫しながら、生徒にとって分かり易い授業をすることに心掛けることが必要だ。
・授業では、興味・関心を高めるような話題や身近にある現象に置き換えて生徒がイメージしやすくなるような工夫をすることが大切だ。
・生徒が板書を書き写すだけの授業だけでなく、思考する場面等生徒を活動させるような授業（アクティブラーニング）にすることが大切だ。
・生徒がノートをとる時間はノートをとらせ、話を聞くときは顔をあげて話を聞くようメリハリをつけることが大切だ。
・発問に対する生徒の返答に対して、できるだけ認めるように反応するよう配慮する必要がある。

○続いて「生徒の反応」や「生徒氏名確認」「生徒との問答」が多かった。実習生が実習授業で最も気になる部分や、気にするところである。せっかく生徒のための授業と思って考えた授業計画も、はじめは緊張のせいや、生徒との関わりが少ない状況にあっては、ほとんど生徒からの反応が得られなかったり、生徒がやる気をなくしたりする場面を経験したことであろう。

○しかし、学生自身の振り返りや、指導教員からのヒントや指導をもとに指導法等を練り直して再チャレンジ、あるいは再々チャレンジして努力を積み重ねたに違いない。結局は、実習生の生徒のためにという熱い思いのやる気がそうさせるものであり、その結果は、生徒の興味関心を引き付け、思考・判断・表現や知識・技能を身に付けさせるに至ったものと考える。実際の声を見てみる。
・説明したことを生徒がしっかり理解しているかどうかを確認することは難しいが、発問などによって何が分かって何が分かっていないかを把握する必要がある。
・生徒の反応を見て理解度を把握したり、察知したりして授業展開を変えることもできなければならない。
・常に生徒と同じ目線に立って授業を進行することが大切だ。
・机間巡視しながら生徒を観察し、授業の進行スピードや授業展開に役立てるとよいことが分かった。
・生徒の顔と氏名を覚え、コミュニケーション機会を増やすことは、授業にも生かせることが分かった。
・授業に向けて教材研究等の準備をしっかりし、一生懸命生徒のための授業をすると、生徒にもしっかり響くことが分かった。
・授業構成は、クラスごとに雰囲気が異なるため、授業中に臨機応変に生徒対応する必要がある。そのためにもクラスごとの特性や生徒の特長などを把握することが大切だ。
・生徒の氏名確認は信頼関係を築くためにも大切なので、認識できるように努める必要がある。

○「実験（演示実験を含む）」については、理科の授業では欠かせない実験についてもいろいろ難しさを体験したようだ。事前の準備から始まり、実験の結果を予測させ、実験の指示をして生徒に活動させる。実験終了後の結果に対する考察、そのまとめ、そして後始末までが授業中に行われなければならない。

○普段の教室での座学とはまた違った難しさを経験して多くを学んだと思われる。具体的な声を見る。
・実験の段取りや指示を明確化するためにも、事前の予備実験は大切だ。
・実験室が普段の教室とは違う環境のため、生徒は集中力をなくす傾向があるため、実験の説明や指示はしっかり聞くよう注意を喚起する必要がある。
・生徒に興味関心を持たせるためには、演示や実験を取り入れることが必要だ。

○次に、「声量・トーン・滑舌」や「視線」「表情」などについても生徒指導以上にいろいろ自己課題として捉えている人がいることが分かった。

○今後は、こうした自己課題を改善できるような努力を積み重ねていくことが大切である。

学生の声を見る。

・生徒への聞き方、言い方に注意すること（否定的な表現をしないこと）が大切だ。
・教師としての威厳を持ち、尊敬されるような言動をすることが大切だ。
・教える側が不安そうにしていると、生徒も不安になるので自信を持つように努める必要がある。
・声量についても普段から意識して生活していなければ身に付かないと思った。

⑶　教育実習を終えて見つけた自己課題（表６）

○フリーアンサーで調査した結果、大きく「授業に関したこと」「生徒に関したこと」と「その他」の３つに分類できた。両キャンパスを合計した結果、自己課題を授業関連として掲げた数は34、生徒関連は21、その他13であった。

○授業に関して最も学生が課題として多く掲げたのは、「教科及びそれ以外のも含めた知識不足」であった。これは、前述した「アンケート調査から言えること」の【⑵学習指導上大変だったことや苦労したこと】で列挙した声と関連している。授業において授業テーマを定め、その時間内に生徒達に目標やねらいとした事柄等について教師の工夫によって興味や関心を持たせた上で、思考・判断・表現をさせ、知識・理解まで到達させるための教師の力量に関わることを課題としている学生が多かった。

○この彼らの授業に関する課題については、教育実習前までにある程度の力量を身に付けさせるために、教職課程を履修し始める１年次から本学の教職課程の各科目の指導者は「教育実習」やその先の教壇を意識して彼らにできるだけ実践的な力を身に付けるよう指導する必要がある。そのためには、表５－２の各項目に対応した具体的指導が必要である。

○次に生徒に関するところでは、「生徒との距離感、接し方、話し方、表現の仕方」と「生徒とのコミュニケーション」を課題としている学生が多かった。これもまた学生が直面した大きな悩み事であったに違いない。生徒あっての学校、生徒あっての学級（ＨＲ）、生徒あっての授業ということを実感してきたに違いない。教師が教師たり得るのは、生徒の存在があったればこそであることを強く認識した結果であろう。「教師は教える人、生徒は教師の言うことに従うもの」などといった感

表６
平成28年度　教育実習を終えて見つけた自己課題（複数回答）

項目	課　　題	秋田C　24人	本荘C　14人	合計	項目計
授業に関して	授業経験の不足	3	1	4	34
	教科、それ以外も含めた知識不足、幅広い知識と教養が必要	10	8	18	
	学習指導力・教授法（実験含む）	4	2	6	
	学習指導要領を踏まえた教材研究と学習指導案の作成	1	0	1	
	授業における全体意識、理解度の違いへの対応	1	1	2	
	グループワークの指導力	1	0	1	
	時間配分と要点を踏まえた授業	1	0	1	
	話し方の改善、声量	1	1	2	
生徒に関して	生徒との距離感、接し方、話し方、表現の仕方	4	2	6	21
	生徒とのコミュニケーション（教員とのコミュニケーション含む）	1	4	5	
	生徒に話しかけられたときに上手に話せること	1	0	1	
	生徒理解	1	2	3	
	生徒の立場に立って考えること	2	0	2	
	生徒に注意できるようになること	1	0	1	
	生徒の氏名と顔を一致させること	0	2	2	
	教育心理に関する知識不足	0	1	1	
その他	てきぱきと要領よく仕事をこなすこと、計画的段取り	3	1	4	13
	メモをとり人の話を正確に聞き取る力	1	0	1	
	その都度調べて自分の言葉で説明できるぐらい理解すること	1	0	1	
	学び続ける努力の必要性	1	1	2	
	社会常識の体得	1	0	1	
	人前で話す経験を積むこと	0	1	1	
	教師としての威厳を持ち、尊敬される存在になること	1	0	1	
	教員としての責任	0	1	1	
	誤字や脱字の改善	0	1	1	

覚を学生が持っていたとすれば、きっと実習期間中に充実感や達成感は得られなかったと思われる。こうした学生の生徒に関する課題への対応として、大学としては教職課程の関係科目の授業で指導するとともに、教育実習前に学校の生徒と接する機会を設定して、学生が生徒に関わる経験をさせる必要があると考える。

○その他としては、「てきぱきと要領よく仕事をこなすこと、計画的段取り」との声が多かった。学校で教師がいかに忙しく動き回っていたかを間近で見てきたことによるものである。教師の仕事は、授業（学習指導）や生徒指導が車の両輪のごとく２本の柱となっているが、それを成り立たせるために、あるいはそれを支えるために、さらに多岐にわたる分野の仕事もこなさなければならないことを実感したことの現れと考える。

○教育実習期間中に教師の多岐にわたる仕事を体験させることは難しい。教育実習期間はどうしても学習指導が中心で、生徒指導の領域はＳＨＲを通じた学級経営で経験するぐらいである。現実は教師の仕事が学習指導と生徒指導の２本柱以外にもたくさんあり、それをこなしながら２本柱をしっかりやっていく能力が求められている実態を認識できたことは貴重な経験だったと言える。多くの学生は、普段は大学の授業や研究に打ち込みながらも、学生自治会やサークルなどの活動、アルバイトやボランティア活動も行っている。それらを通じて、組織人としての在り方や人間関係の大切さを学んだり、責任を持って使命や仕事をこなしたりすることなどが教職の道につながるようであれば何よりである。

6　まとめと考察

⑴　今年度の秋田Ｃの学生について

○「実習校の教育目標」「生徒指導」「学習指導」「勤務態度」の４評価事項の評価の平均点が、それぞれ4.5、4.19、4.33．4.64でありいずれも昨年度に比べて成績が向上した。「学習指導」では0.18向上し、教員の指導力の根幹となる学習指導において学生の取組姿勢や努力等が評価されたことはありがたかったが、「⑬教科内容について理解し、適切な学習指導法が実践できたか」「⑮板書や発問、的確な話し方等授業を行う上での基本的な表現の技術が身に付いていたか」については不安がありそうだ。また、昨年度に比べて伸び率が0.03と最も低かったのが「生徒指導」であり、生徒指導の基本的な指導はできたものの、「⑦学級運営全般における事務処理能」や「⑧学習集団形成に必要な基礎理論・知識の習得と実践」についても若干不安があるようだ。これらは、自己評価や実態調査結果でも同様に確認することができる。

○以上の結果を参考に、今後も実習先の学校から好評価が得られるよう教職課程の関係科目担当者は不安視されたところの改善を中心に、学生の課題を認識して１年次から指導に生かしていく必要がある。特に、「教科に関する科目」の指導者には実践的な学習指導力を身に付ける指導が求められている。

⑵　今年度の本荘Ｃの学生について

○４評価事項とも秋田Ｃより低かっただけでなく、総じて昨年度より低下した。特に気になるのは「生徒指導」と「勤務態度」で、１・２の評価を得た学生が複数いたこと、４評価事項の全てで５の評価が激減したことである。全体的に低下した背景を評価事項から分析した結果は次のとおりである。

○「生徒指導」で全ての観点の評価から言えることは、生徒指導上あるいは学級経営上、教員として備えていなければならない基本的なスタンスが欠けていたと受け止め、生徒理解や学級集団についての理解不足とともに、教員としての自覚や学級担任としての役割についても認識が不足しているということであった。

○「学習指導」でも全ての観点の評価から言えるのは、教科内容への理解不足と適切な学習指導法の実践ができないこと、学習指導上の基本的な表現の技術や態度が身に付いていないこと、教育実習生として学ぶ立場上必要な基本的な態度が身に付いていないということであった。

○「勤務態度」については、実習生として謙虚

で主体的な学びの姿勢に欠け、教員が備えていなければならない責任感や使命感も不安視されているということであった。

○以上の結果を「教育実習」担当者はもとより、「教職課程」関係者も重く受け止める必要がある。特に、「教育実習」及び「教育実習事前事後指導」担当教員は、課題を抱えている学生に対してその課題を指摘して認識させるとともに、意識改革のための指導や、改善に向けた自主的な取組を示唆するなどの必要がある。そして、教育実習先の学校への影響を考えると、次年度に向けて早急に対策を講じなければならない。

○また、「教職に関する科目」及び「教科に関する科目」の担当教員は、こうした教育実習における学生の実態を把握した上で、今後、こうした結果にならないよう、教職課程を履修し始める１年次から「教育実習」及びその先の教壇を意識して学生に指導する必要がある。特に、学生には早いうちから教員に必要な責任感や使命感、謙虚さや主体性、そして常に学び続ける態度を日常の学生生活のあらゆる機会を通じて身に付けるよう指導していかなければならないと考える。

⑶　教職課程における指導の在り方について

○高度情報通信化、グローバル化、少子高齢化など、社会環境は大きく変化してきている。大学の指導者には、昔の学生と今の学生は生育環境が大きく違っているということ、特に自然や地域、大人と接触するという実体験の不足が自然や人間との関係性において昔より劣っていると言われていることを再認識する必要がある。一方で今の学生はＩＣＴ社会で育ってきているためバーチャルでの経験は豊かである。しかし実体験が乏しいため、言動において社会的には稚拙さが認められる学生もいることは否めないところである。したがって「学生だから自主的に学ぶべきこと」と全て学生任せにしていては、いろいろ支障をきたす時代になってきていることから、個人差もあることを見極めながら、ある程度までは大学の教員が指導して学生の持っている力を引き出し、導き育てていく部分も持ち合わせていかなければならないと考える。

○本学にあって「教職課程」の運営主体は、「教職課程運営委員会」であるが、当委員会は「教育実習」に関する学校評価や学生の自己評価、実態調査の結果等の資料を教職課程に関わる全ての教員に提供し、「教育実習」における学生の実態や成果と課題等を把握してもらった上で授業に役立てる必要がある。

○実践的指導力の育成という観点から本学の実態を考えると、「教育実習」前に生徒や学校とかかわる機会を大学が設定していないことから、「教育実習」が一本勝負の場となっており、実践的指導力を身に付けるには脆弱な体制にあると言える。3年次にインターンシップで学校経験をする学生も若干いるが、そもそもそれは教職課程とは趣旨が違う形で行われているため、教員としての指導力にはあまり影響しない。教職課程として何らかの機会を設ける必要があると考える。

○特に「教育実習」では、学習指導に比重が置かれるため、学生はこれを最も重視している。しかし、大学での教職関係の授業における模擬授業だけでは経験不足であること、また生徒と関わる機会が少ないことなどから、多くの学生が自己評価を低くしている実態がある。教職課程の認可を受けた大学として、模擬授業経験を増やしたり、生徒と関わりを持つ機会を増やしたりするなど、教員として必要な資質に近い形まで養成できるような体制づくりが必要である。

7　おわりに

2013（平成25）年1月に閣議決定で内閣に設置された教育再生実行会議は、21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を実行に移していくため、内閣の最重要課題の一つとして教育改革を推進する必要があるということで設けられた会議である。2015（平成27）年5月14日に第30回教育再生実行会議が開催されたが、それを「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について（第七次提言）」として取りまとめた。この提言は、その後の中教審答申にも影響することとなった。同年12月21日に中教審が文部科

学大臣に答申した「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」からの引用文は、前述した通りである。

この答申の中で教員を養成する大学には、次の点などを課題として掲げている（一部表現を簡略化した）。

- 教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を行う段階であることを認識する必要がある。
- 実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させる必要がある。
- 子ども達が課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育む指導力を身に付けることが必要である。
- 課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブ•ラーニング）の視点に立った指導•学習環境の設計やＩＣＴを活用した指導など、様々な学習を展開する上で必要な指導力を身に付けることが必要である。
- 生徒指導や学級経営を行う力の育成にも対応することが重要である。
- 教員が教員としての使命感や児童、生徒の発達に対する理解など、基本的な知識や能力を備えていることが必要となることはもとより、大きく変動する社会の中での教育の在り方に関する理解や、多様化した保護者の関心や要求に対応できる豊かな人間性とたくましさ、小・中学校をはじめとした各学校等の特色や関係性に関する幅広い知見、地域との連携・協働を円滑に行うための資質を備えた教員を養成することも重要である。
- 学校を取り巻く様々な教育課題に対応できる教員の養成を行うことができるよう、教職課程の科目を担当する教員の意識改革や資質能力の向上も重要である。

この答申は、現代における学校教育や教員に対する時代の要請として受け止める必要があると考える。今後の教職課程履修学生には、こうしたことを踏まえながら指導するとともに、その結果として「教育実習」が、実習校の生徒にとっても、また学生自身にとっても意義深いものになるよう働きかけていく必要がある。

最後に、「教育実習」という貴重な体験を終えた学生達が、今後自己課題を改善させながら、学び続けて一人前の教員となることを祈りたい。

［引用・参考文献］

土屋基規（編著）(2009).『現代教職論』東京：学文社

高野和子・岩田康之（編）(2010).『教師教育テキストシリーズ15「教育実習」』東京：学文社

柴田義松・木内　剛（編著）(2011).『教育実習ハンドブック〔増補版〕』東京：学文社

赤星晋作（編著）(2014).『新　教職概論（改訂版）』東京：学文社

秋田大学教育文化学部（2014).『教職ガイド』秋田：秋田大学教育文化学部

梨木昭平（著）(2015).『教職実践演習・教育実習指導』岡山：大学教育出版

教育再生実行会議（2015).『これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育委、教師の在り方について（第七次提言）』

中央教育審議会（2015).『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）』

亀田孝夫（著）(2016).『理論と実践の往還を目指したＳＡＴと地域参加による教員養成教育の展望について』山梨：都留文科大学『教職支援センター年報』第２集

文部科学省ＨＰ「教員をめざそう！」「魅力ある教員を求めて」ｎ.ｄ.